

『社会教育』一九六〇年九月（全日本社会教育連合会）

私の社会教育振興策

—われもし文部大臣なりせば—

去る七月十九日から三日間、信州志賀高原で、第一回全国社会教育研究集会が開かれた。そのプログラムの一つに表題のようなシンポジウムが行われたが、演壇を紙上に移し、にわか仕立ての文部大臣矢口新、永杉喜輔、三井為友の三氏に日頃の初心を披歴していただいた。

（司会者の弁）社会教育の振興をいろいろな立場から考えると、現在の社会教育に対する批判の中で、非常に考えさせられたものは、社会教育は山に登っているということ、つまりむつかしい都市から逃れて、だんだん山村の方に移ってしまったということです。また、社会教育は卒業生を出さないで、優等生をたえず行政の廻りに置いておくということです。いつまでたつても、公民館や社会教育課に依存する民衆を作り上げているということです。こういうことをふまえて「今後の社会教育を如何にすべきか」という点を、各担当者が「われもし文部大臣なりせば」というような気持で自由に提案していただきたいと思います。

（宇佐川清・大阪学芸大学助教授）

〈その1〉

青少年教育を重視する

矢口 新

（国立教育研究所員）

青少年教育のことは今の文部行政、社会教育行政にとって重要なことでありますので、少し述べてみたいと思います。

青年教育に関しては、ご承知のように近々十年来、青年学級振興法によって、多大の成果を上げてきましたことは、皆さんご承知の通りです。わずか八千万円足らずの国費をも

って百万の青年に対して充実した教育を与えているのは、日本の歴史上画期的なことですよ。（笑）まずこの点はどこまでもやるし、この精神は活かして行きたい。これが第一点です。

しかし、仔細にながめますと、いろいろ欠点もあります。この青年学級振興法の対象として参りました青年はほとんど、農村の青年でありま

すので、都市の青年の大部分がワクの中に入っていない。しかし、それをただちに青年学級振興法の欠陥ということとは出来ないのでありまして、ほかにいろいろの事情があるためと思います。

また、農村にあつても、十八才以下の青年に対しては、十分初期の目的を達したとはいえないのであります。青年の自主的な自発的な意志で、共同的学习、町村づくりをして行こうということに関しては、十分に目的を達したといえます。

ただし、十八才未満の青年、都市の勤労青年の教育は、そういうものでは律し切れないものが生活の中にあると思います。したがって、これは、従来の青年教育とは別個の方策をもって、今後、やって行かなければならないと考えます。

これをどう考えたらよいか。まず都市の勤労青少年については、その大部分が、産業の基盤をもっているものと考えていいと思います。多数の青少年が農村の中学校を卒業して、

都市に入つて来て、そして都会の中で、それぞれの職能者として仕事をしている。大企業、中小企業を問わず、まあいわばいろいろの企業体の中に閉じ込められていて、そのワクの中にあるわけですから、それを従来の社会教育行政の方式をもつてとらえるということは、むつかしいことだと考えます。とらえにくい対象を無理にとらえようとしているところに、大きな錯覚があつたといわなければなりません。

学校教育の行政は単なる町村の行政のワクの中ではないのであつて、たとえば工業学校の工業カリキュラムは県単位で幅が広く、地域のワクから離れるのですが、こと青少年に関する行政になると、市町村単位になつていくところにある大きな時代錯誤があつたと思うのです。

そこで、これをとらえるには、いろいろな企業を一括してとらえる方策をもつてしなければならぬと思います。またそういう青年を十ぱ一からげに取り扱って、自主的、自

覚的な共同学習をしるというの間違っている。まず、中学を卒業して三年位の間は、その職能の世界で、技能者として一人前の能力を持つように養成してやるのが大切だ。これが第二点です。

これらの理由をもって、多数の青年をどうおさえたらいかと、これをしっかりとおさえることである。現在、大雑把にみて、十人のうち六人の者が高校に入っている状況にあるから、あと四人は少なくとも教育の機会均等の上からも、国家は高等学校に行っている生徒にかける経費と同じ額の経費を、これら四人の青年にもかけなければならぬ。

この精神からして、このしっかりおさえた四人の青年を、職場なり企業なりで、三年の間、一人前の技能者になるように教育することがいいと思います。しかしこれは、いろいろな社会情勢などから、むしろ、文部省がやるより、労働省にまかせたい。

労働省をもつてすれば、あらゆる企業や職場に技能者養成の義務を課することが出来るので、これによって各企業が技能者養成所を作ると、大部分の都市の青少年はこの中に入ると思います。これは文部省が自分の手を汚さずに、勤労青少年を救うことになると思います。

そして、これから、数年間、労働省が施設設備を各企業体に奨励し、技能者養成所がたくさん出来ましたのちに、これを文部省がいただくということが一番いいと思います。

もちろん、その間、文部省は労働省と緊密な連絡をすることが大切です。これで、大体、都市の勤労青年の問題は解決するんじゃないかと考えます。

次に、農村の青少年の問題であります。以上述べたように、都市の勤労青少年は企業体で働くものとすると、農業者になるものは農業生活の中に入って、そこで教育を受けるべきであります。したがって、現在の農業高校を全部定時制に切り変えたいと思います。

しかし、その定時制は現在の定時制ではなくて、巡回産業高等学校である。学校の教師がぐるぐる廻って歩くのである。この種のものでして、富山には三年間の歴史をもっているものがありますが、あげて巡回式定時制高校に切り変えます。農業教育の方針を根本的に切り変えるのであります。

現在、中学校を卒業しただけで農業についている者を收容し、かねて農業高校を出て農業以外の世界に出て行くものととらえることができる。以上のような方針をもって全面的に

中卒後の青少年を高校の生徒としてあつかうというやり方を決めるわけでありまして、この学校を卒業した二十才以上の青少年のうち、能力のあるものには、大学に入学することはないにしても、大学の教育を受けるチャンスを与えねばならないと思います。

これについては、特別に彼等が利用できる短期大学を設けたらよいと思います。現在の大学をもうすこしこれら青年に開放することをすべきだと思ふ。

更に大学の開放講座を徹底的に普及し、全国にわたって、そういう教育を勤労青年に対して提供する。

なお、農村においては、ご承知のように二十才以上の青年に対しては4Hクラブ、青年建設班等の教育があります。これは農林省と連絡をとって共同で施設・設備を充実することが考えられると思います。

都会においては二十才以上の青年に対しては、現在ほとんどなんらの対策が講ぜられていないのですが、最近、労働省で都会の街角に青少年の施設を作るといふ計画があると聞いていますが、これは労働省と相談の上で、あらゆる手段を講じてこれら施設を作る努力をしたいと思ひます。立派なものでなくともよい、堀立小屋のようなものでもいいから、

たくさん作る。なお、大企業に入っている青少年は、労働組合の傘下にありまして、その教育を受けておりますが、それには、いい面もあると同時に、全面的にいいとばかりいえないものもありますので、これを正しい教育の手にもどすことが大切だと思ひます。

現在の青年教育において、私がいろいろ青年のものの考え方を見ますのに、最近の日本の情勢を反映してか、コップの中の嵐のように、非常に小さい井戸の中でお互に自分の意見を譲らないで、思い込んだら命がけで、たいした意見でもないものを、右左上下といっている。さまざまの派閥が出来て、これによって闘っている点を直さなければならぬと思います。

この原因は、日本の社会の中に、あるいは青年の中に、国際的センスがないからではないだろうか。将来、日本はアジアの中の一員として仕事をして行くということでないで世界の孤児になると思います。

青年も大人も、各職場でも、アジアの中でどう生きて行くかを考えて行かねばならないと思うし、そういうことを考えることが、日本に正しい、新しい雰囲気を作ることではないかと考えます。